

ここでは、著名な学者の式を、この式は使える、これは使えないと、いとも気持ちよく振り分けていたのを思い出す。これは物を造ることに直接タッチされている方々にしかできないことである。そうした資格のある現場技術者の声を技術サロンの場でもっともっと聞かせていただきたいものである。

(筆者・Osamu KUSAKABE, 宇都宮大学助教授)
工学部土木工学科

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

黒田 勝彦



第VI部門論文集は毎年3月と9月に発行され全会員に無料で配布されているという点では他の論文集に比較して最も多くの会員に読まれているはずであるが、“どうも「論文集」という名前に気後れして中味を見る気がしない”とい

う会員が多いのではなからうか？すでに周知のように輸入技術の時代から自前の開発技術の時代に移っている。にもかかわらず多くの土木技術者が組織の中に安住し自前の技術のストックや開発への努力に無関心なのはなからうか？土木界では特に個人の技術が評価されるという伝統をもたないゆえに一部のトップ技術者におんぶされて生活の糧を得ていても自責の念にかられることが少ない。したがって、積極的に自己の向上を図らなくても何とか生きていける。しかも、責任をもたされ、日夜血の出るような努力をしている技術者とダッコちゃん技術者と給料はたいして差がないし生活も安定している。こんな状況では「多くの会員のためになる論文集を!!」と智恵を絞ってみてもしよせん「ああ、論文集か! 関係ない!」ということで屑筆へ直行ということになってしまふ。

昨年来、たまたま論文集編集委員会の幹事長をおおせつかったこともあり、VI部門論文集に関する規程作りに参加し、いろいろの人に多くの意見をお聞きする機会があった。特に、VI部門小委員会の委員長始め各委員の努力と熱意は言葉に書き表わせないほどであり、何とかこの努力の結晶である論文集を一人でも多くの方に読んでいただきたくて、最近ではお会いする人ごとに「第VI部門の論文集をお読み下さい。論文を投稿して下さい

い!」と勧めている。ところが土木学会論文集には創設以来の伝統があり、各部門に対するイメージも固定化され、横割社会に慣れない多くの会員には、「既設の論文集の横糸の役割を果たすVI部門」といってもなかなか慣じみにくいらしい。また、「論文集は難しくても」と頭から敬遠しているむきも多い。えてして権威は民衆とは無縁の存在であり魅力の対象とはなりにくい。論文集は「論文集としての格式と権威」を備える必要があるかもしれないが、度が過ぎると一般技術者とは無縁の存在になる可能性があり魅力もなくなる。このジレンマと必死に闘っておられるのが第VI部門小委員会であるように思える。とはいえ、多くの技術者の意識を改革し、学会への技術者としての参加意識をもっといただくことが今後の学会全体の努力として必要であり、これはVI部門論文集の内容の検討だけで行える事柄ではない。多くの人の宣伝と啓蒙活動が必要で、時にはテーマを決めた特集論文集（もちろん自由投稿論文を排除せずに）等を企画することなど面白い。また、旅費の問題等もあるかもしれないが、地方で活躍するすぐれた技術者にも編集や企画の仕事に参画できる機会を多く作り、草起こしの努力を継続することも必要と思う。自前の旅費でも参画したいと考えている多くの技術者から「学会参画の意識」を抹殺してはならない。そうすることによって、地方に埋もれている「小さな技術」も掘り起こされ光をあてられるようになるのではなからうか？

(筆者・Katsuhiko KURODA, 京都市立大学助教授)
工学部交通土木工学科

3年目を迎えた第VI部門論文集へ望む

中川 博次



新設された第VI部門の論文集を通読して、全会員に親しまれ、活用される論文集を意図して並々ならぬ編集努力が払われた様子がうかがわれ、他部門の論文集とは際立って趣を異にしている。会員の8割以上が実務に携わっている人達であり、それらの会員によって学会が支えられているにもかかわらず、これまで論文集の購読者は15%に満たず、大部分の会員にとって無縁のものと受取られてきた大きな原因として、論文集が主として大学研究者の発

表の場に偏り、実用面での技術成果の発表を寄せつけない堅苦しさがあつたことがあげられる。その点、今回の技術論文集の新機軸は、どの会員にもなじみやすい点で所期の目的を満足させることができたものと認められる。

創刊号はバラエティに富み、個々の内容も興味深いものがあるが、やや総花的で、どちらかという従来学会誌に近い印象を受ける。号を重ねるにつれて技術論文も増え、論文集としての体裁も整うようになってきている。

全体として土木技術の今日的課題への取組みがよく理解でき、特に「展望」や「対談」にみられる各種技術の変遷と将来の見通し、実用化に向けての研究のあり方等の論議は、われわれ大学研究者の認識を新たにさせ、研究の応用的発展を図るうえできわめて有益な示唆を与えてくれる。先端技術に関する知見をうまくまとめた「資料」や若い土木技術者の誇りと情熱があふれた「つうしん」も楽しく、また勇気づけられる。さらに、新技術の開発とその実用成果の発表を促すために、学会の技術賞候補を本論文集に登載されたものの中から選ぶこと等の検討が望まれる。

同じ投稿論文でありながら、論文集と学会誌とでその取扱いが全く異なるのは問題であり、学会誌は依頼論文に限る等、論文集の独自性を確保するための調整が必要である。これまで土木の各分野において第一人者として活躍された方々から、その苦心談や失敗談をうかがって土木技術の要諦を論じるといった企画も、生きた技術を学びとるうえで若い会員にとっても魅力あるものとなる。

なお、他部門の論文集も分冊化と新しい企画の導入によって、各分野の研究動向を比較的容易に把握できるようになったが、研究の必要性や発展性について説得力に乏しい論文も少なくなく、明確な論理展開や洗練された構成に意を注ぎ、論文集の一層の質的向上をはかる努力が必要であろう。

(筆者・Hiroji NAKAGAWA, 京都大学教授)
工学部土木工学科

妙な土木論

山田 正



私は大学を卒業後、大学以外の社会を経験しないまま大学の教師になっています。そのため実務経験、実務感覚に対するコンプレックスに近い渴望感を抱いておりました。このようなときに土木学会論文集第VI部門が開かれ、現場からの生の論文を読むことができるということは、私にとって一つの楽しみにもなっており、上記の渴えを多少とも潤してくれています。それにしても土木という分野の裾の広いこと。それに対して大学で教え得ることの何となく狭さ(時間的制約に起因しているのだが)。

ところで多くの大学において土木系学生の質の低下が語られるようになって何年かたっていますが、これ自身土木という学問評価の本来の平均値に戻ってきたというべきなのでしょうか。私自身も含めて多くの高校生が将来の自分の進路を土木と決めるときに抱く何とも気宇壮大なロマンにも似た胸の疼きと、大学入学後学ばなければならない“土木工学”という名の学問との間に何と大きな隔たりがあることか。そして興味あることに実務についている人達の何とロマンチストが多いことか。大学の方がかえって狭少で、現実主義的傾向の強いこと。このような大学土木界の雰囲気情報が情報過多時代の高校生に何らかの夢をなくしつつあるのではないかと危惧しています。このような現状を顧みると、第VI部門を「工事マネジメントシステム、設計・施工・補修技術、環境公害対策、建設業務、契約・積算」の範囲のみに限定するのは何とも惜しい気がします。もちろん土木学会誌の編集方針との競合性もあり、余り軽々にその内容を拡大するのは考えものですが、私のように常に大学にいて学生に土木工学を教える立場の人間にとって「これが夢のある話だよ」といって語ってやれる部門の論文集が一つぐらいあってもいいような気がします。もちろんその夢の中には工学的見地から見て健全な論理構成に裏打ちされたしっかりとしたものがないといけないとは思いますが、第IV部門のうちの計画にかかわる部分がどちらかといえば将来を把握することを目的としているのに対して、第VI部門の内容はすでに発生した事象を分析した内容が多いように思われますが、これも必ずしもこのように限定する必要もないと思います。過去のガリレオ、